山口誓子全集

第八巻

山口誓子全集

第八巻

俳話・鑑賞集

水原秋桜子
富安風生
山口青邨
大野林火
平畑静塔
監修

明治書院

山口誓子全集　第八卷

三八〇〇円

著者　山口誓子

昭和五十二年四月二十五日發行

發行者　明治書院　代表　三樹彰

印刷者　大日本法令印刷　代表　田中忠

發行所　株式會社　明治書院　千代田區神田錦町一―十六〈一〇一〉
電話二九四―五三三六　振替東京三―四九九一

©1977 S. Yamaguchi
0392—25308—8305　誠光社製本

山口誓子　第八巻　俳話・鑑賞集

目次

第一章　跳躍する芸術（アフォリズム）……一
季節の挨拶……二
跳躍する芸術……一三
遠かなる焚火……八
結社の頂角……一六
第二章　俳句とは如何なる詩か……二一
短歌と俳句……二三
自分自身の句……二五
実作者の読み……二八
感　想……三三
俳句へのいざない……三六
飛躍法……四七
批　評……五七
選後独断……二四
俳句のはなし……二五
随　想……三〇
杜甫と俳句……三五
俳句・その作り方……四三
定　型……五五
第三章　俳句と自然・季節……五九
随　想……六〇
現実尊重……六一
感　想……六〇
想像力について……六二

安西冬衛の詩業……六六
自然と人間……七三
貫之と芭蕉……七五
第四章　俳句と言葉……七九
詩より俳句へ……八〇
随　想……八六
言葉について……九〇
三つの言葉……九八
第五章　俳句の方法……一〇五
写生構成……一〇六
三鬼の句・多佳子の句……一〇七
挨　拶……一〇九
句集『塩田』……一一五
選後私言……一一七
感　想……一一九
短歌写生の説……一二〇
構　図……一二三
第六章　他句鑑賞……一二七
選後私言（抄）……一二八
天然と人間……一二九
「般若心経」と「連想飛躍法」……一三四
言葉について……一三三
感　想……一三七
瞬間の言葉……一三四
添削のこと……一四一
選後独断……一四七
裏返し……一四九
鏡……一五三
句集『海彦』序……一五六
三鬼句集『変身』序……一五七
「旅寝論」より……一五九
花を見て花となる……一六一
工夫のこと……一六三
雑詠句評会……一六九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

雑詠句評会……一三六
秀句の鑑賞（抄）……一五九
選後私言（抄）……二九四
新選秀吟百句（抄）……一四三
選後独断（抄）……二八五
解題……松井利彦…三一九
解説……松井利彦…三三三

第一章　跳躍する芸術（アフォリズム）

季節の挨拶

俳句は駄菓子であると考へてゐるひとがある。その考はやめなければならない。

×

俳句は自然を曝露する文学である。曝露文学の一である。だが、社会悪の曝露には他の文学があつて、俳句は之にあづからない。

×

十七字詩型が三十一字詩型より独立したことに詩の質的転移を見出さなければならない。

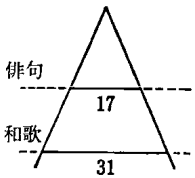
×

俳句の引伸写真は和歌にはならない。

×

俳句の世界と和歌の世界との相異は、その詩型から由来してゐる。

それはあたかも高山に於ける植物帯の相異にも等しい。



×

身辺の瑣事に詩を看出す。

シユウル・レアリストは云つてゐる。「人間の存在の現実それ自身はつまらない。この根本的な偉大なつまらなさを感ずることが詩的動機である。詩とはこのつまらない現実を一種独特の興味（不思議な快感）をもつて意識さす一つの方法である」と。

×

いけないのは「季題」といふことばである。

×

自然そのものが一冊の歳時記でなくてはならない。

「自然は書物である」といふことばがありましたね。

×

A　季題は造化と人間との季節的契機だ。

B　それなら、万象が季節ではないか。

A　さういふ議論もある。だが、それは畢竟俳句鑑賞の社会性を知らざるものの議論だ。

季題は社会的に是認せられたものでなければならない。

×

季題は主（あるじ）の門標である。ときに同居人の門標の並んでゐることはあるが、その家の主（あるじ）は唯一人である。

×

俳句の詩型十七字は生々しい疵口だ。

われわれはそれによつて作者の疼痛を如実に感覚する。

×

俳句の詩型十七字は詩の最小なるカンバスだ。
詩の最小なるカンバスは刹那的印象を要求する。

×

俳句にあつては、形式が内容を規制するのではあるが、だからといつて、現実を歪曲、圧殺、変形、萎縮するものと即断してはならない。
何故なれば、われわれは俳句の形式によつて、その形式の要求する現実を、ありの儘に酌みとるのだから。

×

経験は自然から直接に、そして作品から間接に得られる。
自然から直接の経験を得ようといふのが写生主義である。
たゞそれだけである。

×

客観主義は誤まられて「内への沈潜」なき「外への放散」と看做されてゐる。
だが、「内への沈潜」なくして詩があるであらうか。
「内への沈潜」につゞく「外への放散」こそ真の客観主義である。

×

客観に徹したものゝ貌(かほ)は痴呆に似てゐる。

×

自然の事象は生命の触媒である。
客観詩は生命の昇華である。

×

季物は造化を象徴する（俳句の自然に於ける象徴関係）
部分は全体を象徴する（俳句の観照に於ける象徴関係）
客観は主観を象徴する（俳句の表現に於ける象徴関係）
われわれは客観から三段跳(ホップ・ステップ・ジャンプ)に依て直ちに造化に参入することが出来る。
俳句が象徴の詩であることを斯く体系的に解さねばならない。

×

要するに問題は、素材の如何ではなくして、之を如何に取扱つてゐるかである。
たとひ素材が異つてゐても、取扱方の似てゐる句は救はれない。

×

「甲」を描かんとするには二途ある。
一は「甲」そのものを描くことである。即ち直接描写之である。このとき重心は「甲」の上にある。
他は「甲」を描かんとして非「甲」を描くことである。即ち間接描写之である。このとき重心は「甲」の上にない。

×

「甲」そのものを描くことは明かに近代の風潮である。
ホト、ギスの現在歩んでゐる一の道はまさにこの道である。
この方途は「甲」そのものをあまたのファクタア（空間的位置、時間的経過、形態、色彩等）より構成せらるゝ全一と

見、その中核的ファクタアを摘出して以てその全一を描かんとするものである。
それを私は象徴的描写と呼ぶ。そのファクタアに依て全一を描かんとすることを。

×

「甲」を描かんとして非「甲」を描くことは必らずしも近代の風潮ではない。
然しこの道も亦ホトヽギスの現在歩んでゐる一の道である。
この方途は非「甲」を描かんとするのではなくして、非「甲」を描くことに依て「甲」を最も如実に、最も雄弁に描かんとするものである。
それをも私は象徴的描写と呼ぶ。非「甲」に依て「甲」を描かんとすることを。

×

然し、「甲」と非「甲」との間には趣味的な配合といふが如き観念を些かも挿むことを要しない。
所謂俳句の配合体は骨董品である。
俳句の配合体時代は既に過去に属せんとしつゝある。
俳句は象徴詩時代に更生せんとしつゝある。そこにこそ俳句の「近代性」がある。

×

象徴的な直接描写と間接描写。

×

子規の第一次の俳句革命は「写生主義」と「客観主義」の樹立にあつた。
虚子の第二次の俳句革命は配合観念の克服に依る象徴観念の樹立にある。
彼は方法の革命。是は観念の革命。

×

季題趣味に立脚し、配合体を組成する。
季題趣味に立脚せず、事物の核心を剔抉する。

×

一人称俳句。三人称俳句。それは何れでもいゝ。
だが、一人称にして同時に三人称の俳句。これは断然いけない。

×

エフレイノフの作に「検察官」といふ演出戯曲がある（ゴーゴリ原作の戯曲の一断片を五通りに仕組んだ演出家達の喜劇）
一の素材に対する多角的描写のサムプルとして。
曰く古典劇的演出
曰くスタニスラーフスキイ式の写実的演出
曰くマックス・ラインハルト式の怪奇劇的演出
曰くゴーヅン・クレーグ式の神秘劇的演出
曰く映画劇的演出

×

「ことば一般」には所有権関係はない。
だが「詩のことば」はその作者個人の占有する私有財産で

ある。

しかし時にはその作者の占有を離れて他人の私有財産にもなる。

民法第百九十二条「平穏且公然ニ動産ノ占有ヲ始メタル者カ善意ニシテ且過失ナキトキハ即時ニ其動産ノ上ニ行使スル権利ヲ取得ス」

×

言葉は万物を包含す——グウルモン

しかし実際、言葉は読む者の包含するだけの物しか包含しない。

×

言葉はとても人見知りをする。

×

池谷信三郎ではないが「言葉は舌を出してゐる」

×

「正しく」「美しく」といふ修辞学の標語はそつくりそのまま俳句にも適用する。

「正しく美しい俳句」

×

「や」「かな」は大写(クローズ・アップ)である。

×

短かい一巻に大写が二度も出て来ては助からない。

所謂「や・かな」の忌むべき理由は茲にある。

×

「や」は一の絶縁体である。一句の全円的な融合を現出せしめんが為の仮の絶縁体である。

水準を高位ならしめんが為の仮の堰板である。

結合の前の分離——俳句にも福本イズムがある。

×

助詞は形象間の混凝土である、動かすことの出来ない。

我国は手爾乎波第一の国なれば先哲の作を味ひ、一字も麁末なることなかるべし—芭蕉

×

凡庸作家の俳句は季節の挨拶に過ぎない。

×

剽製の俳句がある。

×

耳鼻相通じた俳句。さういつた俳句がのぞましい。

×

万葉に東歌あり紀元節秋桜子

金色の仏ぞおはす蕨かな同

われわれはこれほど大胆にふるまふ作家を知らない。

芸術に於ける論理の飛躍には素晴しい調和がある。

×

燭あかく弥勒のおはす良夜かな秋桜子

厨子の前望のひかりの来てゐたり同

この作家の巧みなる舞台装置と巧みなる照明。

×

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

青みどろもたげてかなし菖蒲の芽　素十

自然の啓示につと胸のせぐくまるやうな、それも単に哀しいとか、単に愛しいとかいふことばでは云ひ尽せないかなしさ、しかもそれらを総て含めたかなしさ。

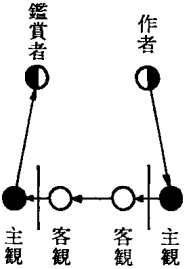
「もののあはれ」とはかゝる「かなしさ」ではあるまいか。

×

道のべに牡丹散りてかくれなし　夜半

この句の「かくれなし」といふ言葉ほど、「存在の肯定」を強調し、「非存在の否定」を吹聴した言葉を私は知らない。

×



作者から鑑賞者への伝達装置は電送写真のそれとすつかり同じではないか。

「主観」の光波は「客観」の電波となつて伝達される。

×

一壺酒、我ひとり酌めばこれ鑑賞。我も酌み、彼にも差さばこれ批評。

×

選者は如何なる作家の、如何なる作句と雖、必らず之に没入、沈潜しなければ之に是非の判別を下すことを得ない。是非の判別を下すことを得なければ選句は成り立たない。

選句は一の潜水作業である。

×

伯楽不二常有一——選者虚子の存在を想ふ。

×

歪みたるものゝ背後に正しきものを視、その背後の正しきものに依て歪みたるものを矯むること——さう説明しただけでも添削の難渋さが大凡察せられる。

×

風格とは芸術の世界に於ける作家の人格である。世俗的に所謂「人格」とは必らずしも同一ではない。

×

連作俳句には少くとも五つの齣が必要なのだが——

×

連作論に音楽のソナタ形式論をもつてきたらどうであらうか。

×

われわれが現代に棲息してゐる以上、現代がわれわれの芸術に反映して来るのは当然のことである。否われわれの芸術には現代が反映されてゐなければならないのだ。

われわれの芸術に現代があるといふことを何故恥ぢようとするのか。

×

複雑な事象は俳句の短小なる詩型を溢れ出てしまふ。それが湛へ得る事象にはおのづから限度がある。

だからわれわれはその限りある事象をその中に湛へようとするのだ。

ことさら単一をめざすことを要しない。

単一とはその限られたる事象の上の程度の問題である。それは作家の嗜好の問題である。食欲の問題である。

要は事象が単一なりや否やではなく、限られた事象が平衡（バランス）を保つてゐるかどうかといふ点にある。

×

古へ（いにしへ）への回顧はわれわれの足もとを明るうする手提灯である。

われわれは古へ（いにしへ）の俳句より少くとも一歩は先んじてゐなければならない。

一歩は前へ！――レーニンの著書の名ではない。近代俳句の作家のスローガンである。

×

古典主義が単に古典への思慕に終るときはわざはひなるかな。

古典主義は古典の精神を現代に生かすことでなければならない。

×

井泉水にとつては「俳句に徹底する」ことは「俳句を揚棄する」ことであつた。そして「俳句の顛落」を来たすことであつた。

×

過去に於てこそ作家であつたが、現在に於ては最早作家でないといふことを「作家の没落」といふ言葉で云ひ現はす。

作家は常に現在に於て作家でなければならない。

×

新らしいホトヽギスが来ると一時的に興奮して作句にいそしむ作家よ。ホトヽギスは催春剤ではない。

×

選者虚子の芸術意識と、彼を囲繞する作家の芸術意識との相関関係をあとづけること、これがホトヽギス俳壇発展史の総（プレス）てである。

×

ホトヽギスの雑詠の投稿が三句となり、一句となつたとき、沮まれたる雑詠は地方雑誌に殺到し、氾濫するにちがひない。

ホトヽギスといふ官立学校の入学難はいきほひ地方雑誌といふ私立学校の繁栄を来たすにちがひない。

そしてそこに地方雑誌の企業時代が出現する。

×

句会は一、二時間のうちに決せられる投機である。

だから句会に出ると心身ともに疲れる。

×

句会の清記に当つて、他の作家の俳句の字句を改竄すること、それを私は大きな罪悪だと心得てゐる。

作家が折角「ふるさと」を以て置き換へがたき字句としたるにも拘らず、之を残酷にも「故里」と書き換へたり――することは。

「ふるさと」と「故里」の陰影のちがひがわからないやうな作家は犬に喰はれてしまへ。

×

マルキストが社会現象をあまりに階級的に見るやうに、われわれは自然現象をあまりに俳句的に見る。

（「ホトトギス」昭和6年1月）

遽かなる焚火

×

自然は色盲の検査図である。

俳句作家の健全な眼を以て之を見れば、その中に浮きあがつた詩がある。

×

われわれの近代俳句――花鳥諷詠詩の意義は畢竟伝統を新しく看直すところにある。

われわれは伝統俳句の配合趣味（古きイデオロギーたる趣味的世界観）を濾過して、花鳥風月のみをのこしたのだ。

×

組織の単なる構成者ではなくして、その組織を統率する構成者――それが季題である。季題はオーケストラの指揮者である。

×

俳句だつて、時に痺れをきらして、十七字詩型から片足をはみ出すことがある。

五・七・六調も時には許さねばならない。

×

俳句の詩型は何が故に十七字であるかと問ふことは、婦人の週期は何が故に二十八日であるかと問ふにも等しい。

われわれにとつて、俳句の詩型は生理的の問題である。

×

十七字といふことは皮膚の黄色いといふことゝ同じく疑ふことの出来ない形である――箒草

×

定型詩に於ては、その詩型を通しての世界が発展する。

×

俳句に於て所謂「形式」とは二つのものを指す。

一は云ふ迄もなく「定型」そのもの

他は「表現様式」

前者は与へられた肉体そのもの

後者は作者みづからのデザインに任された衣装

×

自然の事象を十七字の笊に掬つて、ゆさぶり、いらないものを摘んで捨てる。

かくて俳句の創作はかの安来節を伴奏とする泥鰌掬ひである。

る。

×

われわれ写生主義者にとつて、作品の素材たる自然の事象は常に自然界に於ける何処かの特定地点に於て採取せらるゝものである。

その最も典型的なものが謂ふところの「名所俳句」である。

×

感じは一つの実在である――グウルモン

×

情緒再現の唯一の方法はその形象化である。主観の客観化である。「物をして物自身を物語らしめよ」である。

×

「物自身が物語つてゐる物」

俳人の無口と俳人の饒舌とは両つながらこのことから釈明し得られる。

×

榊原紫峰の空気に色のある花鳥図絵

水原秋桜子の余白に色のある花鳥俳句

×

真にAを描くことは、Aそのものを他のA^1から描きわけることである。

×

一般者Aを描くのではなくして、飽迄個別者Aを描くのである。

×

ニコラス・ブッサンが云つてゐる。

「絵画に於ける新しさは、必らずしも嘗て見ざる題材の裡に在るのではなく、寧ろ新しい布置と表現との裡にある、斯くてあり来りの旧めかしい題材も、オリヂナルな新しいものとなるのだ」

×

言葉があるだけでほかに何もない俳句がある。

×

個体と環境との平衡を描くこと（間接描写）

個体の要素間の平衡を描くこと（直接描写）

×

事象間の平衡（バランス）を測定するものは「感情の論理」である。かうなくては事象間の平衡が破れるぞとわれわれをしてのつぴきならず思はしめること。

×

いゝ作品のよさがわからないもどかしさ

孫過庭の書譜のよさがわからないもどかしさ

×

句会の選句は一つの流動作業（フリース・フルバイト）である。

強化された労働である。

×

句会で作る句の前半にはいゝ句がないから惜みなく捨てるといふ作家がある。

俳句にもウオーミング・アップがある。

×

人間は財産関係に於てこそ、有産者であるか、無産者であるかである。

だが自然との関係に於ては「一般者」である。

だから自然の観照をことゝする俳句の世界はとりもなほさず「一般者」の世界である。

有産者の世界でもなければ、無産者の世界でもない。

×

マルキストの知的労働の集団化たる「共同製作」は畢竟天狗俳諧ではあるまいか。

×

マルキストの気障な口吻をかりて云へば次のやうなことになる——

森川暁水の作品はその題材が小市民的であり、大衆的であると同時に、その表現様式が極めて容易く大衆に理解さるゝものである。その様式は断じてインテリゲンチヤ的な難渋さを持つてゐない。

×

所謂俳句の大衆化とは真に何を意味するか。それを明かならしむる為には問題を区別しなければならない。

A大衆化とは、大衆とは果して何であるか

B何が大衆化されるのであるか

C如何に大衆化されるのであるか

×

大衆化とは——大衆とは俳句に関係せしめらる、「一般者」を意味し、大衆化とはその範囲の拡大を意味する。だから大衆化とは必らずしもプロレタリア化を意味するものではない。

×

何が——花鳥諷詠の大衆化でなければならない。それが花鳥諷詠以外のものであつたり、他の不純物によつて稀薄にされたものであつたりしてはならない。どこまでも花鳥諷詠の浸透でなければならない。

×

如何に——云ふ迄もなくインテリゲンチヤ的な難渋さを持たない表現様式に於て。

×

「俳句の階級性」を論断しやうとすれば、俳句の対象たる自然それ自体の階級性を明かならしむるか、その自然との関係に於ける作家（と同時に鑑賞家）の階級性を明かならしめなければならない。

だが自然それ自体は階級を超越した存在であり、又作家（と同時に鑑賞家）は自然への関係に於ては「一般者」である。

（超階級といふ考方そのものが既にブルジョア・イデオロギーであるさうだが、それは先方の勝手である）

×

性急にもマルキストは、先づ俳句を装飾的芸術なりとし、

一般に装飾性は手工業的生産の努力の現れであると考へる。そしてそのとき、手工業的生産は封建的社会の生産形式であつたことを想起する。

さうだ俳句はかゝる封建的生産形式の上に咲いた華だ。

そして彼等の結論はかうである。

「俳句は封建的イデオロギーの産物である。それ故に一定の歴史的限界性を負うてゐる」

×

俳句が封建時代と結びつくのは、唯それが封建時代に連句から分離して独立の詩に迄高揚したこと、然も封建時代に於ける武士階級の隠遁者芭蕉が之を独立の詩に迄高揚したこと、それだけである。

×

われわれホトヽギス俳徒は飽迄現実に直面し、現実に立脚し、現実に出発し、現実に徹底せんとする。

だからわれわれのイズムは決して、プロレタリア・リアリズムの鋭く対立するところの現実逃避的ロマンテイシズムではない。

×

俳句の創作には「生産原価」の問題はない。だから俳壇に於ては先輩も後輩も等しく同架である。

×

広く俳句に関する労働は、それが恬淡の詩(?)「俳句」に関するといふだけの理由で全く評価されてゐない。

この恬淡の詩(?)といふ考方が如何に近代俳句の認識を謬まらしめてゐることか。

×

句作すること——は脳細胞の急激な燃焼である。あたまの焚火である。

×

添削に於ては先づ作者と添削者との血液型を験べて見なければならない。

添削した為に作者の詩が凝集しないとも限らないから。

×

揮毫は人をしてあたかもギプスの中にあるが如き硬直を感ぜしむるものである。

呼吸は停止し、心臓は括約し、血液は怒張し、四肢は顫動する。

揮毫は憤怒とともに身体にははなはだ有害である。

×

作者は常に何等かの意味に於て流動し発展してゐるものである。

だから作者の個々の作品は之を作者の流動、発展の過程として眺めなければうそだ。

一と晩にかほのかはりぬ暑気中り　暁　水

水洟のほとけにちかくなられけり　同

この作者を「巷間市井の卑俗な詩人」と固定的に決めてかかる限り之等の句のまことはわからない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com